

過去の経験を未来に生かして

子どもの笑顔が何よりも支えとなって、もう長いこと教壇に立っています。たぶん、自分の願いを子どもに重ねて接しているのだと思います。

学年主任物語

若かった頃の不安定な社会状況の中、「社会を変えるのは教育だ…。」と心の底から確信したことも、教育にかける情熱を保ち続けるよう自分を後押ししているのかもしれない。

でも、教員になってから今現在まで、ずっと試行錯誤の連続の毎日です。「少しでも、子どものためになるように…。」

と、いろいろな本を読んだり、良いと言われていることに取り組んでみたりしてきました。でも、「それだけでは十分でない…。ある程度の経験や、経験から得た指導の呼吸のようなものが必要なんだ。」と感じるようになりました。

と同時に、「自分の経験からやっと分かってきたことを、これからの先生方に伝えたいし、これからの先生方にも勉強して欲しい。」と思うようにもなったのです。

まだ、経験の浅い先生は、迷い、試行錯誤しながらも全力で仕事をしています。それも、教科の指導方法や生徒指導、保護者との対応で悩んだり、疲れ切ったりすることも多いと思います。経験のある自分でさえ日々、試行錯誤しているのですから、やむを得ないことなのだと思うのです。

今の自分の願いは、これからの先生が自信を持って指導して欲しいということ。自分にできることは、何だろうか？

同じ仲間の先輩として、これからの先生がさまざまなことで押しつぶされないようにサポートすることもかもしれない。



多少、自分が忙しくても相談や悩み事を受けたら、できるだけ親身になって相談にのり助言したい。直接本人から相談や悩みを受けなくても「あれっ？」と感じるときには気軽に声を掛けるようにしたい。そして、接する時には相手の言葉を鵜呑みにせずに「なぜ、こういうことを言っているの？」など、言葉の奥にある、本人も気付いていない真意を汲むようにしたい。突発的なことが起こっても、何か起こるのが学校だし、子どもなのだから、職員が前向きにとらえられるように「ここから何か学ばせていきましょう。」という姿勢で話をしていきたい。

ただ、心配しているのは、自分の過去の経験を語るだけでは「また、昔話をしゃべって。」と思われる気がするのです。若い先生との感覚の違いの溝を埋め、若い先生の気持ちに近づくためにも、自分も一緒に未知のこと、これからのことを同じ気持ちで勉強していかなければならないと思っています。今までの自分の経験だけでは、思いこみが優先して実態把握が的確でなかったり、アドバイスした目的や方向を間違えたりしてしまいそうなのです。

自分はあと何年かで定年を迎えますが、そこをゴールと考えるのではなく、これからの先生と同じ距離感のあるゴールを目指して、これからの先生方を支えていこう。そうすることが、今の自分を育ててくれた先輩の先生や支えてくれた子どもたちの笑顔に報いるために、自分ができることなのかもしれない、と気持ちを新たに今日も学校に向かいます。